

漢方概論

KAMPO

西洋医学と漢方医学の違い

解説 大野 修嗣 先生 大野クリニック 院長



- 西洋医学と漢方医学の違いは
 - ① 要素還元主義的で再現性のある検証し得る事象を対象にするか（西洋医学）
経験知を基軸に歴史的経験から集積された事象を根拠にするか（漢方医学）
 - ② 病名で捉えるか（西洋医学）、生体反応の総和（証）で捉えるか（漢方医学）
 - ③ 身体と精神を区別し、RCT を根拠とするか（西洋医学）
身体と精神を表裏一体で捉えようとするか（漢方医学）
- 漢方医学では「同病異治・異病同治」という考え方で西洋医学とは異なるアプローチを行うことがある
- 現代医学において西洋医学は欠かすことができず、漢方医学は西洋医学の補完的役割として、また漢方医学の得意な病態で、さらには西洋医学で対応できない場面などに用いる

西洋医学と漢方医学の比較

西洋医学と漢方医学を比較していきます。

西洋医学は、デカルトの要素還元主義を基軸とした現代科学理論で医学を捉えます。再現性があり、検証し得る事象を対象とします。

一方の漢方医学は、臨床の現場の経験知を基軸として

構築された治療学です。数千年の歴史的経験から集積された事象を根拠としています。

西洋医学では、病態について病理学を基本とした「病名」という identity（同一性）で捉えるのに対し、漢方医学は、病態を病因と生体反応の総和と位置付けた治療学であり、病態を「証」という identity（同一性）で捉えます。「証」とは治療方法の診断と言い換えることができます。

西洋医学

デカルトの要素還元主義を基軸とした
現代科学理論

再現性のある検証し得る事象を対象

要素還元主義

ある物事を、「構成する要素」に分析し、個々の要素を解析することで全体を理解しようとする考え方

漢方医学

臨床の現場の経験知を基軸として
構築された治療学

歴史的経験から集積された事象を根拠

西洋医学

病態を病理学を基本とした
「病名」という
identity で捉える



漢方医学

病態を「証」という
identity で捉える



西洋医学では、病態を身体と精神を明確に区別する視点で捉えます。具体的方法論として、薬物の評価においてはRCT（randomized controlled trial）によってなされます。すなわち、再現性の向上のためにランダム割付を行い、情報バイアスの防止のために二重盲検とします。これにより信頼性が担保された臨床試験となり治療方法の根幹をなしています。

漢方医学では、身体と精神を表裏一体で捉えようとします。これを「心身一如^{しんしんいちにょ}」と表現します。したがって、漢方医学理論は、未だその本体が厳密には解明されていない、論理学でいう「操作的定義」（観察によって確認することができない概念を、操作〈観測〉によって定義する方法論）にあたると考えられます。

●身体と精神は表裏一体

ここで「心身一如」の一例を示します。

たとえば、主訴が「便秘」の場合、西洋医学では塩類下剤、大腸刺激性下剤、上皮機能変容薬などで排便を促

すことに集中します。一方、漢方医学の対応は、便秘以外の身体的状態および精神的状態を考慮します。生理不順や気逆を伴えば桃核承気湯^{とうかくじょうきとう}、気うつ傾向を伴えば麻子仁丸^{ましにんがん}、皮膚・粘膜の乾燥、気力・体力低下を伴えば潤腸湯^{じゆんちやうとう}となります。

したがって、漢方医学では主訴だけでなく全身状態を考慮して治療方法を選択します。

同病異治と異病同治

次に、漢方医学の特徴である、「同病異治^{どうびょうい}」「異病同治^{いびょうどう}」についてみていきましょう。

西洋医学的には同じ病名でも漢方医学的には異なる治療法を選択することがあります。これを「同病異治」といいます。逆に、西洋医学的には異なった病名でも漢方医学的には同じ漢方薬での治療となることがあります。これを「異病同治」といいます。

小柴胡湯^{しょうさいことう}を例に挙げてみます。小柴胡湯は漢方医学的には胸脇苦満、心煩、往来寒熱、食欲不振などを目標に



西洋医学

排便を促す治療薬を選択

塩類下剤
大腸刺激性下剤
上皮機能変容薬

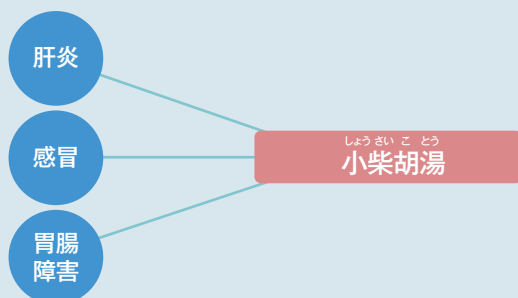
漢方医学

便秘以外の身体的状態および精神的状態を考慮した治療薬の選択

とう かくじょうき とう
桃核承気湯 生理不順や気逆を伴う
まし にんがん
麻子仁丸 気うつ傾向
じゆんちやうとう
潤腸湯 皮膚・粘膜の乾燥、
気力・体力低下

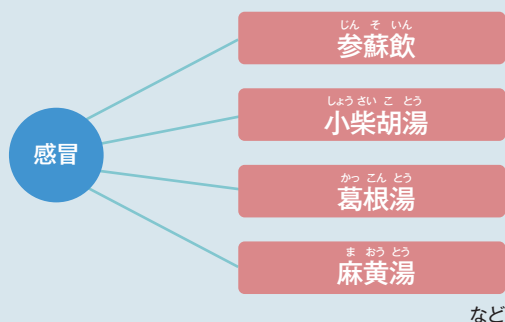
異なった病名でも漢方医学的には同じ治療法

異病同治



同じ病名でも漢方医学的には異なる治療法

同病異治



用いられますが、西洋医学的病名としては肝炎、感冒、胃腸障害などに適応があります。これを「異病同治」といいます。また、感冒では小柴胡湯以外に参蘇飲、葛根湯、麻黄湯などもその病態によって選択され、「同病異治」となります。

現代医療における漢方の位置づけ

次に現代医療における漢方の位置づけについて考えてみましょう。

現代医療における治療方法として、西洋医学の治療は欠かせません。とくにワクチンをはじめとする予防医学、生命予後に関する治療学は圧倒的に西洋医学に優位性があります。

それでは、漢方医学はどのような場面で用いられるのでしょうか。

●漢方が得意な病態

漢方医学は西洋医学の補完的役割として、また漢方医学の得意な病態で、さらには西洋医学で対応できない場面などに用います。

漢方薬が得意な病態の例をみていきましょう。その一つに「冷え」があります。「冷え」は臨床的にさまざまな病態の原因、誘因になることが知られています。しかし、西洋医学的には希薄な論点といえます。「冷え」を目標に症状、症候を改善させることは漢方医学の得意とするところです。

冷えを改善する漢方薬は多くあり、四肢末梢の冷えを改善させる代表的漢方薬に当帰四逆加呉茱萸生薑湯があります。冷え症で体質虚弱な方で、寒冷のため手足が冷えて痛み、下腹部痛や腰痛などを訴える場合に用います。

冷えは臨床的にさまざまな病態の原因、誘因になる



西洋医学



西洋医学的には希薄な論点

漢方医学



冷えを目標に症状、症候を改善
漢方が得意な病態

●西洋医学的に治療方法がない病態

もう一つは、西洋医学的に治療方法がない病態です。

漢方はアンメット・メディカル・ニーズに応える有用な手段になり得ます。たとえば、全身倦怠感、肌の乾燥、発汗、冷え症など、生命に支障はないものの、QOL改善のために患者から強く求められている症状に対する医療ニーズなどです。漢方医学には補脾益気（気力・体力を養う）、滋潤（皮膚粘膜を潤す）、燥湿（止汗など）、温補（温める）などの治療手段があります。

とう き し ぎやく か ご しゆ ゆ しようきょうとう

当帰四逆加呉茱萸生姜湯

構成生薬

たいそう けい ひ しやくやく とう き もくつう かんぞう ご しゆ ゆ さいしん しようきょう
大棗 桂皮 芍薬 当帰 木通 甘草 呉茱萸 細辛 生姜

使用目標 Ⅱ 証

平素より冷え症で体質虚弱な人が、寒冷のため手足が冷えて痛み、下腹部痛や腰痛などを訴える場合に用いる。

- 1) 頭痛、悪心、嘔吐などを伴う場合。
- 2) 下腹部や腰部に外科的手術の既往があつて上記の症状を呈する場合にも多く用いられる。

監修：大塚恭男，花輪壽彦（北里大学）

西洋医学的に治療方法がない病態

アンメット・メディカル・ニーズ (Unmet Medical Needs)

全身倦怠感

肌の乾燥

発汗

冷え症

補脾益気
(気力・体力を養う)

滋潤
(皮膚粘膜を潤す)

燥湿
(止汗など)

温補
(温める)

漢方概論

「西洋医学と漢方医学の違い」は、動画でもご覧頂けます。

動画をご覧になる場合は、ツムラメディカルサイトの会員登録が必要です。

